

平成29年9月11日

京都市立芸術大学及び京都市立銅駝美術工芸高等学校移転整備工事
設計業務委託に係る公募型プロポーザル 審査講評

京都市立芸術大学移転整備工事設計業務受託者選定委員会
委員長 門内輝行

京都市立芸術大学（以下「京都芸大」という。）は、建学以来140年にわたり、国内外の芸術界や産業界で活躍する人々を輩出し、文化芸術の発展に貢献してきました。京都市は、京都芸大が世界に向けて一層の飛躍を果たすとともに、京都のまちとともに発展していくよう、京都駅東部エリアへの移転整備を進めることとしています。また、京都芸大と同じく京都府画学校を起源とする京都市立銅駝美術工芸高等学校（以下「銅駝美工」という。）も、学校施設の充実や高大連携の推進等の効果が期待できることから、同じ敷地に移転整備することとしています。京都市では、これらの移転整備によって、この地域が文化芸術創造の“火床”となり、「文化芸術都市・京都」の新たなシンボルゾーンとなることを目指しています。

新キャンパスでは、美術学部、音楽学部、研究機関など、多様な専門的諸室が必要となる一方で、専攻間の機器等の共有化や美術と音楽の活動の融合を推進するとともに、時代の変化にも対応できる柔軟性を持つ革新的な空間を実現することが重要な課題となります。また、長く、快適に、創造活動を行うことができるキャンパスの整備には、大学・高校の教職員、学生・生徒、地域住民などの使い手とも十分語り合い、創造的なキャンパスを育てていく対話型の設計プロセスを展開することが不可欠であり、そのためには多様な関係主体が設計に参加できる柔軟な組織体制を構築することが期待されます。さらに、このキャンパスの移転整備は設計期間が3年、施工期間が3年という長期にわたる事業であるとともに、京都駅東部エリアの核となる公共施設の建設でもあることから、求められる機能を確実に実現し、適切なコスト・スケジュール管理のもと、着実に業務を遂行する必要があります。

以上のような視点を踏まえて、世界へ飛躍する京都芸大及び銅駝美工の新しいキャンパスを共に創り上げるための設計者を選定するため、公募型プロポーザル方式による設計者選定を実施し、国内外から広く提案を募ることとしました。

こうした考えのもとに実施された本プロポーザルの技術提案では、①キャンパス計画のシステム・プロセス・主体に関わる「フレーム」の提案、②「基本コンセプトの具現化」と「大学と都市との関係」についての新しい提案、③「対話による設計プロセスや実施体制」の具体的な提案を求めたことが、大きな特徴になっています。このことから、審査にあたっては、多様性と統一性、部分と全体が相互に関係し合う有機的な秩序を備え、時間の経過とともに変更が可能であり、成長し続ける新しいキャンパスのフレームとそれを具現化した空間を提案する創造力を評価するとともに、大学・高校・まちの思いをしっかりと汲み取り、柔軟にキャンパスを進化させていく実行力・対話能力を重視しました。

受託候補者には、多くの関係主体と対話を重ねながらも、創造力を発揮して設計をまとめる手腕があること、また、創造的なキャンパスのフレームやそれを具現化した空間についても、設計プロセスの中で大きく発展していく可能性があることを評価しました。

これから、対話による設計を通じて、大学・高校と都市・地域との新しい関係を構築するとともに、国内外から多くの人々が集まり、交流し、世界に広がる創造の一大拠点となる魅力あふれるキャンパスが創り上げられることを大いに期待しています。

受託候補者（乾・RING・フジワラボ・o+h・吉村設計共同体）

大学の基本コンセプトをよく理解し、それを「ひとつのまちが生まれ成長するように大学をつくる」「つくる・つかう・のこす」が融合したプロセス」「地域の生活空間とともにある有機的なキャンパス」という3つのフレームによって具現化し、まちと共に成長し続けるキャンパスを提案しています。具体的には、京都のみちと奥庭の性質をうまくキャンパス内に取り入れ、周辺のまちとのつながり、キャンパス内のつながりを生み出す仕掛けを考案しています。特に、高瀬川に沿って新機構軸、共通工房という2つの創造軸を配置し、鴨川まで連続する一体のランドスケープとして発展させた点などに大きな力量を感じます。また、更新を容易にする二段階の構造の仕組み（マトリクスフロアとフレキシブルストラクチャー）を提案し、キャンパス空間をより良い空間へと進化させていく可能性を示しました。

第二次審査では、斬新な空間の提案が精巧な模型によって明確に示され、そのポテンシャルの高さを理解することができました。同時に、設計者がキャンパス計画についての考えをしっかりと持ち、その内容を的確に提案しながらも、状況に応じて柔軟に対応する対話能力を有していること、さらに管理技術者を中心とするチームワークの良さについても一歩抜き出ていることを確認しました。

以上を踏まえて、ともに新しいキャンパスを創り上げるパートナーとして最もふさわしい設計者であると高く評価し、受託候補者に選定しました。

今後、設計者がチームワークを生かして、意欲的に、粘り強く関係主体との対話に臨み、検討を重ね、原案をより良い設計案に発展させていくことを期待します。

第2位（C+A・平田晃久・スキーマ・ティーハウス設計共同体）

Box（ボックス）と呼ぶ校舎を、高瀬川などの周辺環境や風の向きに応じて配置し、Terra（テラ）と呼ぶ起伏のある人工地盤で各Boxを結ぶことにより、独立性を確保しつつもつながりを持たせ、キャンパスの一体感を生み出すとともに、都心部への移転でありながら、緑を多く配置し、芸術の感性を刺激する自然に囲まれたキャンパスを生み出す大変密度の高い提案でした。さらに、移動可能な家具やマイクロストラクチャーシステムからなるInterface（インターフェース）を組み込み、キャンパスの更新可能性を担保しています。

複数の設計者が得意分野を生かし、Box、Terra、Interfaceの設計を担う役割分担とし、対話型の設計やマネジメントにも専門家を配置する手厚い実施体制が構築されています。

新しい京都芸大の可能性を感じさせる提案であり、自然と都市との関係を問い直し、使い手とともに設計を力強く進めていこうとする設計者の姿勢は特筆に値するものでした。

第3位（山本・石本設計共同体）

複雑なプログラムや制約を微塵も感じさせない整った形態の建築空間を「音楽の庭」「高瀬川の庭」「美術の庭」の周りに配置し、それらをフローティングテラスで軽やかにつなぎ、統一感のある美しいキャンパス空間を実現しています。京都のまちの最大の魅力を「お見世」として捉え、その概念をキャンパスに取り入れ、芸術の生まれる姿を積極的に見せ、多くの人が集まる観光地となるキャンパスにするという提案であり、特に第二次審査で提示された完成度の高い模型や分かりやすいプレゼンテーションは説得力のあるものでした。

各地区のテーマ設定が明快で、それに応じたワークショップのテーマや進め方も分かりやすく示されています。関係主体の合意形成を着実に進める設計プロセスの提案は、設計者の対話を重視した大学施設等の豊富な実績に裏打ちされたものであり、高く評価されました。

その他の第一次審査通過者について（五十音順）

kwhg・Tato・安井設計共同体による、水平に連続するテラスを全面にめぐらせた「群雲テラス」と名付けられた提案には、「テラス」という大学の基本コンセプトを文字通り実現していかうとする設計者の真摯な姿勢があらわれており、「つかうチーム」「つくるチーム」「全体統括」というチーム体制も創造力と実現可能性の両立に十分配慮したものでした。

楨総合計画事務所による、分節型でありながら、パブリックスペースを連担させる配置によりキャンパスにつながりを持たせた提案は、“まち”から“にわ”へというコンセプト、巧みな配置・動線計画、軒線の導入による統一感と計画の自由度のある美しいキャンパスデザインなど、すべての面においてよく練りこまれ、これまでのキャンパス空間の豊富な実績に基づく着実な実施体制と設計の進め方の提案は説得力のあるものでした。

宮本・宮本・ドット・デネフェス・オンデザイン設計共同体は、並行する二本の軸に沿って美術学部が入るハウス群や共通部門の建築群を配置し、ハウス群上部にダイナミックな大屋根と高校が入るチューブ状の構造体を置き、音楽学部を鴨川沿いに配置しています。地域に広がるキャンパスの活動を具体的にイメージしながら、個性あふれる建築家たちが協働するユニークなプロセスを通してキャンパスを実現する提案でした。

本プロポーザルに対しては、国内だけでなく海外からも広く応募をいただきました。第一次審査の対象となった25者の提案には、新しいキャンパスを創造しようとする熱意が伝わってくる、質の高い素晴らしい提案が数多く含まれていたため、審査に時間を要しました。

第二次審査の対象とした6者の提案は、いずれも創造的なキャンパスについて、機能面だけでなく、周辺のまちとの関わりや大学の果たすべき役割まで踏み込んだ考察を行い、具体的な提案に盛り込んでおられました。また、プレゼンテーションについても、短い準備期間であったにも関わらず、精巧な模型や工夫を凝らしたスライドを用意され、提案者の熱意、真剣さ、チームワークの良さが伝わり、審査員一同、感銘を受けました。

本プロポーザルに多大な労力を注いでいただいたすべての応募者に敬意を表します。